



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ジャコウネズミ研究の新プロジェクト計画へのいざないージャコウネズミの人為移動とインド洋～南シナ海の海洋貿易（文理連携研究の推進！）
Author(s)	大館, 大學
Description	要旨の出典：『生き物文化誌学会 第九回学術大会（東京農業大学）要旨集』 p.25
Relation	生き物文化誌学会 第9回学術大会, 平成23年11月12日, 東京都
Issue Date	2011-11
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/50892
Type	conference presentation
File Information	odachi_poster.pdf, ポスター



ジャコウネズミ研究の新プロジェクト計画へのいざない

海のシルクロード、インド洋交易、南シナ海交易がもたらした知られざる小動物の移動史

Immigrations of the house shrews by trades in southern Asia and the Indian Ocean coastal regions



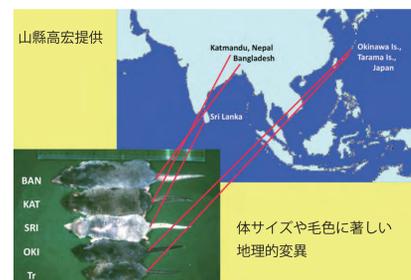
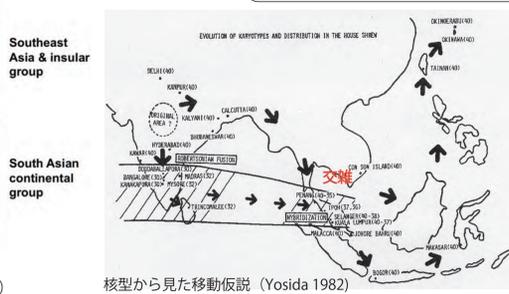
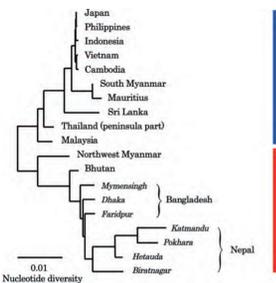
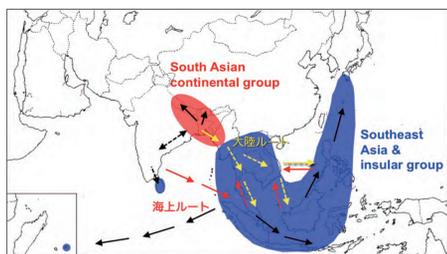
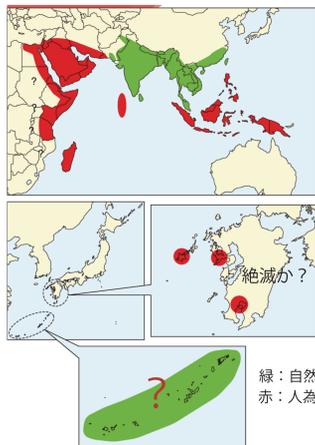
大館大学(智志) Satoshi D. OHDACHI

北海道大学低温科学研究所・環境科学院
090-1382-9943 (不在時は電話してください)
ohd@pop.lowtem.hokudai.ac.jp
Twitter: @sdohdachi Facebook: 大館傳右衛門(上のアドレス)



ジャコウネズミとは? *Suncus murinus* (Linnaeus, 1766)

真無盲腸目トガリネズミ科ジネズミ亜科
体重は雄が45-180g、雌が30-100g。旧食虫目(モグラやトガリネズミの仲間)でネズミの仲間(齧歯類)ではなく、旧世界南方に広く分布。無脊椎動物を主な餌とし、いも類、穀類なども副次的に食べる。食虫目のなかでは飢餓に強くまた雑食性が強いために船舶などで人為移動することが知られている。インドから東南アジア大陸部が原産地と言われる。また住家性もつよい。この性質のため飼育しやすく、織田統一教授(元名古屋大農、現岡山理科大)らによって実験動物化され、その生物学的性質がかなり詳細にわかっている。南アジア-東南アジアにかけては遺伝子分析の結果、人為的に移動したという仮説が提唱されている。



ミトコンドリア DNA より見たジャコウネズミ移動の仮説 (山縣高宏提供)

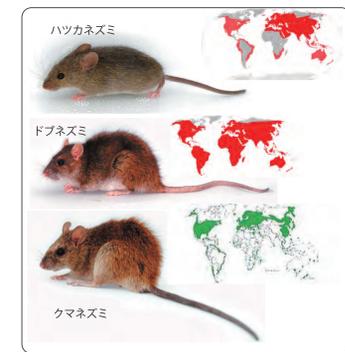
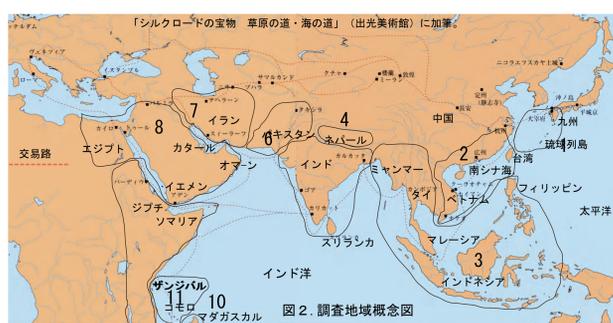
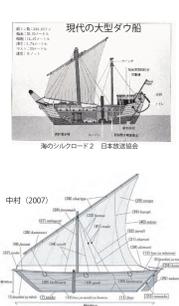
核型から見た移動仮説 (Yosida 1982)

インド洋西側地域についての移動ルートや変異の詳細は不明。
複数回移住や交雑の検討 (マイクロサテライト遺伝子多型による集団遺伝学的解析)

人と動物の関係史の新たなる視点

1. 移動の経路と交易史との関連

インド洋~南シナ海海域はモンスーン季節風を利用して古来より貿易がさかんであり、華人系、マレー系、インド系、そしてイスラーム勃興以降にはアラブ人やペルシャ人が、さかんに交易活動を行った。さらに16世紀以降はヨーロッパ諸国が加わった。日本では中世・近世の朱印船貿易、琉球貿易、長崎貿易がこの貿易ネットワークの東端を担っていた。このような人間の活動に伴ってジャコウネズミは移動したと思われ、交易や人の移動ルート、船舶の種類や積荷が彼らの人為移動とどのように関連しているかを調べる必要がある。生物学的特性から温帯南部以南のモンスーン気候帯にしか分布しない。これは住家性齧歯類の人為移動による全地球的分散とはちがひ、分布拡大の生態学的・歴史的要因をかなり特定できる利点がある。日本(九州)には南蛮貿易や琉球経由などで近世以降に渡ってきたらしいが詳しくはわからない(現在では絶滅か?)。一方、琉球列島についての起源は今のところ自然分布と考えられるが、人為移入の可能性も否定できない。いずれにせよジャコウネズミは南方の海洋貿易と密接に関連した動物である。



参考: 住家性ネズミ類の分布

住家性の齧歯類には、北インドないしアジア原産のハツカネズミ (*Mus musculus*)、中央アジアあるいはメソポタミア原産といわれるドブネズミ (*Rattus norvegicus*)、東南アジア原産と思われるクマネズミ (*R. rattus*) がいるが、いずれも先史時代に農耕文化をもった人間の移動とともに分布を広げていったと思われる。ドブネズミは16世紀にはヨーロッパに到達し、産業革命以来全世界に分布を広げる。クマネズミも1世紀にはヨーロッパに到達したとおもわれる。

2. 呼称の言語学的面白さ

例えば、マダガスカル人(マンジュガ地方)はジャコウネズミのことを voalavo arabo (アラブの鼠)と呼んでいるが、彼らの現住地といわれるインドネシアやマレーシアでは Celurut rumah や Cencurut Rumah と呼ばれ、齧歯類の鼠類とは異なる系統の単語が用いられている。これはマダガスカルではアラブ商人とともにジャコウネズミが移入したことを暗示している。

単語は動物の移動と共に伝わるのか? 在来分布域と移住分布域では呼称の特性が違うのか?

3. ジャコウネズミをめぐるフォークロアの比較

例1) 中国: チンチンと鳴き声は銅銭を数える音で、商売上縁起がよい(鼠のことがジャコウネズミか不明)。長崎: 鳴き声を聞くと吉兆とされる。那覇: 与那国: チンチンとなけば良いことがある。与那国では神との仲介役で飼育の習慣が近年まであった。宮古島: 縁起の悪い物、唾を吐きつける(宮古島市総合博物館)

例2) ガネーシャの乗物の変異



フォークロアの類型は? 在来地域と移入地域の比較。
動物移入とともに伝承も移動したのか?
伝承がうまれた背景は? 海洋交易と関係か?

研究目的

1. 各地域のジャコウネズミの遺伝学・形態学的関係に基づき起源と移動ルートを調べる。
2. 定着の生態的条件と絶滅要因。(なぜ喜望峰以西や地中海沿岸に分布域を広げないか?)
3. 移動ルートの海洋貿易史の歴史学的な裏付けと関連づけをする。
4. ジャコウネズミを表す単語の分布と伝播。
5. ジャコウネズミをめぐる各地のフォークロアの比較。

今このところの共同研究者リスト
研究代表者 大館智志(北海道大学低温科学研究所) 総括、動物学、系統地理学、現地採集
理系
織田統一(岡山理科大学理学部) 顧問、動物学的調査
湯本貴和(総合地球環境学研究所) 文理境界、琉球列島、東アフリカ
鈴木仁(北海道大学環境科学院) 複数回移入、分子系統地理学
増田隆一(北海道大学大学院) 分子系統学、考古 DNA 分析、南蛮貿易
本川雅治(京都大学総合博物館) 生物地理学、形態、中国南部、ベトナム、台湾
川田伸一郎(国立科学博物館) 分類学、形態、核型、ベトナム、台湾
山縣高宏(名古屋大学大学院生命農学研究所) 集団遺伝学、分子系統学、インド方面・東南アジア
村上正志(千葉大学理学部) 定着・絶滅の生態学的解析
新井智(国立感染症研究所) 感染ウイルスとジャコウネズミの共進化
城ヶ原貴通(岡山理科大学理学部) 動物学的調査
坪田敏男(北海道大学獣医学研究科)、押田龍夫(帯広畜産大学) 採集協力
山口誠之(Qatar University) 哺乳類学、現地の情報収集、現地調査の調整 カタール、アラブ地域。
S.A. Huusain (Wildlife Institute of India) インド方面調査。Karim Nasher (Saana Univ.) イエメン調査。
文系
深澤秀夫(東京外大アジア・アフリカ研) 社会人類学、インド洋交易史、マダガスカル方面
守川知子(北海道大学文学部) 西アジア史、インド・イスラーム史、イラン
花淵馨也(北海道医療大学) 文化人類学、インド洋交易史、コモロ諸島、アフリカ東方島嶼

興味ある方々のさらなる協力参加を願います! 予算も!



現在、科研費基金 A に応募していますが受からなくても、個々の既存の予算枠で来年度から徐々に始めていきます。



ジャコウネズミのキャラバン行動

城ヶ原貴通撮影



琉球進出船



16世紀のポルトガルの商船

キャラック船

Hobby Net ワイトランド